

## 新隠居論 「サラリーマン」の定年退職者に思いを寄せる

## ——「サラリーマンの一生」——

鈴木和夫（元凸版印刷社長）

私か社長、会長、相談役を務めていた一九八一年（昭和五十六年）頃から、昨年二〇〇六年（平成十八年）六月に会社を退任した時までの約二十五年間に、定年を迎えて退職してゆく私よりも年下の社員がやって来て、「永い間、お世話様になりました。私は本日六十歳の誕生日をもって定年退職いたします」と挨拶をするのを、何度聞かされたかは覚えていない。

その都度、私は「大変に永い間ご苦労様でした。これからは生活のリズムが変わるので、健康には十分に気をつけてくださいね」と、挨拶を返した。そして椅子に向かい合って腰掛け、あらためて彼等の顔を見るときもなく見ると、艶々として元氣一杯の明るい表情の人と、それとは全く反対に、何だか元氣がなく暗い感じを受ける人と、大別して二つのグループがあるのに気がついた。

「これから、どうするの？」と聞くと、前者のグループに属する人の中には、「今までやりたいことが一杯ありましたが、仕事に追われて、まとまったことが出来なかったもので、これから、一つそれをまとめてものにしようと思ってみます」と、これからの人生設計をたつぷりと話してくれる元氣の塊のような人。また、「ボケ防止のために大学院の講座を聴きにゆき勉強します」とか、今まで外国の旅をしていないので、家内と一緒に豪華船で地中海、エーゲ海を巡ってきます」と本当にその日が待ち遠しい様子の人。あるいは、まだ身体も精神も健康なので「老人介護のボランティア活動をやってみたい」などと張り切っている人もいた。

私はその時に「会社としては勿体ないな！ このような人こそ、まだまだこれからも色々な専門部署で長年磨き上げた腕前を發揮して働いてもらいたい。何か工夫はないものか」と考えてみたり、「いや、この人達に新しい第二の人生を送らせてあげるのが、本当の意味での親切ではないだろうか」とも思いつつ、また、「定年退職は、次の人達に活躍の道を開けてやることにより、企業に新しい風を取り入れるための制度として必要ではないか」などと、色々と心に迷いを残したままで、とうとう今日に到ってしまった。

後者のグループに属する人の中には、「今まで会社の仕事に全力を注いで、それ一本に打ち込んできたので、定年を迎えて、さてこれからどうしようかと考えてはいるけれど、目下、頭の中はカラッポです」という「青菜に塩」の様子の人がいる。私として何を話してよいのやら、途方に暮れてどうにも手の差し伸べようもなく、胸を詰まらせるだけであった。

定年退職のご挨拶にみえたそれらの多くの人達を、この二つの極端なタイプに分類してしまうのは、少し乱暴且つ失礼であるかも知れない。しかし後者に属する人は、永い間、「終身雇用」という一種の生活保障により、働き盛りの期間を、サラリーマンとしてまじめに仕事をこなしつつ、家族を支えて子供を育てるといふ、そのことに総てをかけてきた人達だ。

それ故急激な時代の変化に対応する心の余裕がなかったとも言えよう。主に大東亜戦争の末期から敗戦後間もなくの頃の生まれで真面目な人が多い。この世代は、サラリーマンとして企業で働く人達だけでなく、役人や教育者、学者や医者など組織の中で働いていた人達も、住宅ローンにより若い頃から持ち家に住み、ある程度安定した生活をエンジョイしてきた。

「終身雇用」、「年功序列」、「企業内組合」の三位がうまく一体化して世界でも類を見ないスピードで

経済発展していた時期と重なっていたのだ。私は、敗戦直後から昨年の六月の来までの六十年と六カ月、サラリーマン生活を続けて来た人間であるので、その間の事情は人並みに体験をしてきたと思っっている。

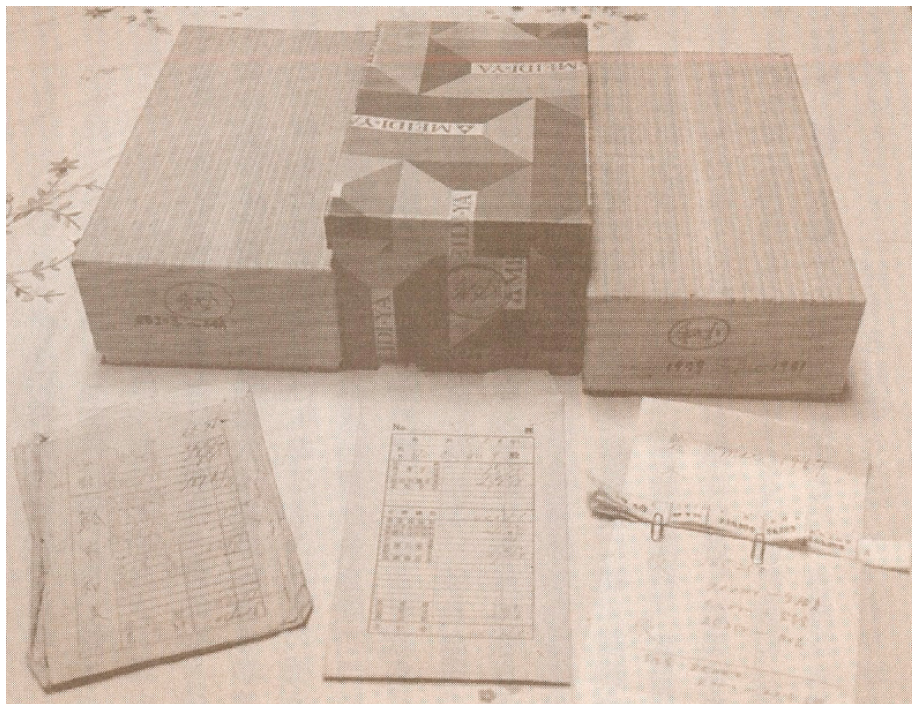
ここで、話が少し脱線することをご容赦いただきたい。私はサラリーマン生活に關連した、恐らく他の人は持つていないと思われる宝物を持つている。その宝物は私のサラリーマン生活の浮沈を、はつきりと示す「証拠物件」であつて、他人様をご覧に



なつても、「日記」のように見当がつくような代物ではない。それは、私が昭和二十年十二月に現在の凸版印刷株式会社に入社して以来、昨年六月までの毎月頂戴してきた総ての「月給袋」である。その数は年二回の賞与袋を入れれば、優に八百五十袋に達する。そこにはその時々々の日本経済社会の景气、不景气をあらわすデータや、私か上司から睨まれていた時、信頼されていた時の昇給額の少ない、多いの結果が如実に表れている。世間ではサラリーマンは、「努力と運が半々だ」などと言われる。部下を下敷きにして功績を独り

占めする意地の悪い上司の下で働くのと、その反対とでは、雲泥の差があつても、自分で選択出来ることではないだけに、「運が良い、運が悪い」と、言うしかないのかも知れない。私も、そのような辛い目に遭つてもいるし、また頭の下がるような有り難い扱いを頂いたこともある。そして今でもその上司の顔が見えてくる。それらの上司は、どなたもとつくに故人となつておられるので、どちらが天国に行かれ、どちらが地獄に行かれたか、そんな詮索は無用で、どなたも天国で静かにお休みになつておられることをお祈りするだけである。何れにせよ、私以外ではこの資料を解読出来るのは、六十一年間共に暮らして来た家内で、半分くらいは解読出来るであろう。

私は会社で働き、家内はほとんど専業主婦として、私の母と共に家計を賄い、子供の養育と教育の大仕事をやってくれたのだから、会社から戴いた給料袋は、封を切らずにそのまま家内に手渡した。家内はその都度、両手で受け取り「ありがとうございます。ご苦労様でした」と言うのが習慣のようになっていたし、それをわれわれは当然のことと思つていた。月末に戴く給料袋の中の「お札」が縦に立たないまでも、横に立つか立たないかが、サラリーマンの一つの夢であつた時期もあつた。私もその夢



に挑戦した。しかし、その楽しい夢も、給料が銀行振り込みになった時に、あえなく消えてしまった。

その影響はそのような楽しみが薄れただけではなかった。現金で給料が渡されていた時に、中には、どうしても手に入れたかは知らないが、別に、金額が記入されていない給料袋を手に入れて、そこから飲み代や小遣いを減額して、適当な数字を書き込んで家に渡していた。奇特な人。がいて、ちよつとした騒ぎになった。ある人が「給料の銀行振り込みが、日本の家庭の実権を男性から女性に移した一番大きな影響だ」と、しみじみと語ったことがある。良い悪いは考え方によるが、確かに影響は一時的なものではないだけに、おおいに議論する価値のある話であろう。何もかも「レディー・ファースト」の国である筈のアメリカ社会でも「家庭のお金を握っているのは旦那である」と、かつて聞いたことがある。

アメリカでもこの話は昔話かも知れない。わが国ではコンピュータが給料計算を手より非常に早く正確に出来るようになったために、経理部の合理化の為に行われたのであった。今の給料袋には、給料全額とそれから引かれる、税金、健康保険料、食事代などの記入のみで、その残高が銀行に振り込まれますという報告書のようなものである。給料袋に。げんなま。が入っていた時に比べると、一ヶ月汗水流して働いたことに対する対価としての「ありがたさ」、「重み」が、申し訳ないが薄れているように思うのは、私だけではないだろう。

話がサラリーマンの定年退職者のことから、とんだ話になったが、定年退職者が「ご隠居様」という言葉に繋がるのかどうか、「新隠居論」をイメージするために、色々と考えてみた。現在は「ご隠居様」とは言わず、主に、家計の責任を次の世代に渡す年齢、それを「高年齢者」とか「高齢者」と一般に呼んでいるようだが、その高年齢の線引きは曖昧かつ主観的な部分がある。高年齢者とは定年退職者もしくは高齢年金給付対象以上の人を言うとも考えられる。国連の世界保健機関(WHO)の定義では、六十五歳以上の人のことを高齢者としている。六十五〜七十五歳までを前期高齢者、七十五歳以上を後期高齢者と定義をしているとのこと。この数字については、わが日本国の場合、私は個人的に男女共に身体も心も健康状態が良くなり社会情勢も変化している現在では、サラリーマンの定年年齢を含めて、それぞれ五歳ずつ引き上げても良いのではないかと思っている。



「新隠居論」を論ずる前に、隠居という言葉から受ける私のイメージとしては、どうしても「ご隠居様」が浮かんでくる。頭巾を被って杖をつき、お供を伴って、あちこちに顔を出して「年寄りの知恵」で色々と世間に奉仕する姿である。さしずめ、徳川御三家の水戸藩二代目の藩主であった光圀公の姿が私には浮かんでくるのだ。彼の修養・見識・事業は名君の典型と考えられている。後世、格さん、助さんをつれて全国を漫遊して「水戸黄門様」と親しまれたという話が子供の頃からずっと私の頭に入る（この話に関しては後世の人の作り話が多いとのこと）。しかし、彼が隠居生活に入った歳は六十三歳とあるのを、ある資料で知って、今と変わらないのにちょっと驚いた。

文化活動の面では、松尾芭蕉翁の旅姿であろう。かれは蕉風と呼ばれる芸術性高い句風を確立して、俳聖と呼ばれている。伊賀の国の役人を退職して江戸の深川に「芭蕉庵」という草庵を結んだ。一般論で考えれば、その時に彼は隠居生活に入ったことになる。しかし、その時の彼の年齢は三十六歳であったという。これはまた水戸黄門様とは反対で、そんなに早く隠居したのかと、こちらの方もびっくり。

（「ほぼづゑ」二〇〇七年新年 第五十一号 特集「新隠居論」）